

G.A.ビュルガーの初版『詩集』の出版をめぐる諸問題

糟谷 惠次

Einige Probleme über die “*Gedichte* 1778” G.A. Bürgers

Keiji KASUYA

1775年、20代の後半に入ったビュルガーは、それまで種々の年鑑ならびに雑誌に単発的に公表してきた詩篇を、未発表の詩とともに一冊の詩集にまとめることを思いつく。数年後の1778年春、28頁に及ぶ予約注文者リストと短い序文を含む『詩集』*Gedichte* (8 *Mit Kupfern von Chodowiecki. Mit Churfürstl. Saechs. gnaedigstem Privilegio. Göttingen: Dieterich 1778. 28 unpaginierte, XXII, 328 S.*) は、66篇の詩を採録してゲッティンゲンのディーテリヒ出版社から上梓された¹。ちなみにその後この『詩集』は、部分的な推敲と配列の変更を施され、さらに新しい重要な後期詩篇を追加されて、いわゆる決定版自選『詩集』*Gedichte* (1789年)の二巻本へと進化してゆく。

ところで一般に現在われわれが詩人ビュルガーの詩作品にふれようとする場合、そこで注目するのは後者の第二版であり、初版ではない。死後刊行された全集のほとんどすべてがそのテキストを第二版に準拠しており、生前みずからの作品に推敲に推敲を重ねたビュルガーの制作過程を両者の比較によって問題にするケースを除くなら、詩人の作品の全容を理解するうえでは明らかに後版こそがより多くの手がかりを与えてくれることは言うまでもない。したがって、初版刊行の準備中にビュルガー自身がすでにその後の新たな選集を予感し必要と感じたように、第二版は初版を補完し完全な姿に鑄直す詩的作業の成果であったことは明らかである。

本稿は、ここで敢えて1778年刊行の『詩集』をめぐる問題をその外的状況から取り上げる。「レノーレ」*Lenore* (1773)をはじめとするバラードや何篇もの抒情詩によって当時の文学界ですでに一名を馳せ、ホメーロスの翻訳によってもたしかに物議を醸していたビュルガー。その彼が、この『詩集』の刊行によって始めて、みずからの詩人としての名声と立場をよりいっそう確固たるものにしようともくろんだのであった。刊行に際し、それまで箇々の誌上にばらばらに点在していた詩篇は取捨選択され配列された。そこには当然ながらしかの作者の意図が込められたはずである。しかし同時に、そうした純粋な詩作行為とは次元の異なる外的要因が幾重にもはたらいたことも事実である。この小論では、そうした外的制約が『詩集』成立の過程でいかなる影響を及ぼしたか、またその読者がビュルガーの基本的文学姿勢を決定する「民衆詩」*Volkspoesie* の理念といかなる関係にあるのかを明らかにしたい²。

1. 「詩的信条告白」としての序文

1778年版『詩集』の序文の中でビュルガーは、自分がまずそこで書き留めたかったのはポエジーの民衆性 (*Volksmäßigkeit*) に関する「詳細な信条告白³」であったと述べている。すなわち彼は、「序言のかわりに、核となる詩論のようなものを表わす(自己の)詩的信条告白を前置きする⁴」(1777年7月17日付ボイエ宛書簡)ことを構想する。この「詩的信条告白」に関しては、1777年から1778年にかけて書簡の中で、たとえば次のように繰り返し語られている。

ポエジーにおいては、いかに崇高で神聖なものであろうと、すべてが感性的で目や手で捉えられるもの (sinnlich, faßlich und anschaulich) でなければなりません。さもないとそれは、この世界のためのポエジーではなくなり、別の世界のためのポエジーになってしまいます——しかしそのようなものはどこにも存在しないのです。[中略] ぼくにはだんだんと自分の女神である「通俗性」の存在が確固たるものに思えてきます。その名以外の他の名前で詩人たちに救済と不死が与えられることはないのです。そして、ポエジーのあらゆるジャンルにおける通俗性が幻影などでないのは、疑うべくもなく確かなことであり、まさに真実の言葉なのです。信じてください！信じてください、ぼくの言うことを！通俗的に取り扱われえないようなものはポエジーの対象でありはしません。すべて人の子は、あらゆるポエジーの源である泉のすぐ近くに住んでいるからこそ、そこから飲むことができるのです。(1777年9月29日付ポイエ宛書簡 *Briefe II*, S. 145)

また、詩集の準備に臨んで、自己の「核心的詩論」を練り上げたビュルガーは、「ぼくの序言は、民衆を求めてその名を用いるかぎりすべてのポエジーが民衆に即していなければならぬ、という命題を論ずるものだ」と述べ、「当初はただぼんやりとした思いではあった」この理念がいまや「他人にはっきり確信をもって見せる勇氣を持てるほどに明快な真実になった」(1778年3月9日付ポイエ宛書簡 *Briefe II*, S. 245f.) との確信を得る。

しかしながら、この計画の中に組み入れられていなかった外的な要因が奇しくも彼にもっと短い序言を強要することになる。『詩集』刊行に際し、出版業者ディーテリヒがそのために用意できる用紙の数量が予想に反して少なく、準備された24ボーゲンの用紙は、そのうち20ボーゲンを詩篇に振りあてると、序文・目次・予約者名簿のために残されるのはわずか4ボーゲンにすぎないという物理的制約が生じたのである。「予約者名簿がとてつもなく多くのスペースを取ってしまいます。[中略]ぼくが計画した序言は使えません。[中略]これではありきたりの序言ようなものが載ることになるでしょう。」(1778年3月23日付ポイエ宛書簡 *Briefe II*, S. 254f.)

このことによってビュルガーは、計画していた本格的詩論の叙述を断念し、彼が「唯一の真のポエジーと認め、あらゆる他の詩的なこしらえものを凌駕する民衆詩が本来いかなる特質と可能性をもっているかを示す⁵」試みを後日の課題にゆだねる。結果として、短縮されたこの序言は1778年版『詩集』の導入部となり、当初の計画とは異なった形と内容で公表されることになった。しかしそれでも、この序言の中には、その後の彼の文学観を如実に物語る決定的な発言も見受けられ、それはビュルガーの全詩論を理解する上できわめて重要な意味を持っている。

そこでビュルガーは、自分がそれまで思い描いてきた詩学上の「目標」にたどりついたことを報告し、自己の詩学の根幹をなす次の有名な命題を明らかにする。

わたしは次の条項の真理をかたく信ずる。それは軸であり、その方向へとわたしの全詩学は向きを変えるのだ。すなわち、あらゆる文芸は民衆に即したものでありうる、またそうあるべきである。なぜならそれこそが文芸の完全性の印だからである⁶。

2. テキストと外的制約

さて、本格的な詩論となるはずであった序文とならんで、『詩集』本体を形成する詩篇も、ビュルガーにとって深刻な外的制約を受けた。

当初、詩篇の印刷用におよそ24ボーゲンの量の用紙を計算していたビュルガーは、それでも詩の選択と推敲ならびに新しい作品の制作に多忙を極める。

いまぼくの作品集はますます急を要しています。しばしば真夜中にベッドから跳ね起きて、机に向かいます。自分でもおかしく思えます。約束した枚数が一杯になるようにただ不安のあまり詩句をつくっているのですから。(1778年2月16日付ボイエ宛書簡 *Briefe II*, S. 231)

しかし間近に迫った引き渡し期限は否応なく彼を駆り立てる。

ここだけの話ですが、ぼくはいま、詩作しては手摺みで印刷機に回しているのです。しかし、それがなかなかよいようです。他の仕方でははかどりません。(1778年3月23日付ボイエ宛書簡 *Briefe II*, S. 256)

だが、すでに言及したとおり、実際に使用可能な用紙の量はそれより少ない20ボーゲンであった。期待に反して予定より少ない用紙しか自由にできないことを知った時、ビュルガーは最善の作品のいくつかを手元に残さなければならぬと悟る。

こうした外的制約から生まれた『詩集』に採録された詩は計66篇である。巻頭を飾る、1769年春と付された“*Nachtfeier der Venus*”から、1778年4月の制作年を持つ末尾の“*Auch ein Lied an den lieben Mond*”まで、目次で順に番号が振られている。しかしその順序は必ずしも詩の成立時期とは一致してはいない。採録された詩篇の多くには制作年が付されているが、それらの日付が必ずしも現実のそれとは一致しないからである。その点についてビュルガー本人がボイエ宛書簡の中で次のように述べている。

各詩篇の上に記載されている日付についてきみは時々おかしく思うでしょう。どうしようもなかったのです。時として嘘をつかなければならなかったり、あるいはたんなる偶然にしたがって決定しなければならなかったのは、銅版画を前に載せる詩篇は釣合の取れる途中で分ける必要があったからです。しかしとにかくそれらは偶然にも大部分においてあるがままの順序に仕上がっています。きみ以外、誰がぼくをうそつきだと非難できるでしょう！この配列からぼくの精神の進展を説明しようと努力する素晴らしい愚か者を笑ってやろうではありませんか。(1778年4月6日付ボイエ宛書簡 *Briefe II*, S. 268)

1778年版の『詩集』は、おおそ編年体で構成されてはいるが、以上のような物理的制約がここでも詩篇の配列と順序というきわめて内的な事柄にまで多大な影響を及ぼしていることがわかる。

ちなみにこれらの詩篇は——部分的に変更され順序を替えられて——1789年版の『詩集』に再録された。そこでは、「ミンネの歌」*Minnelied*は「ガブリエーレ」*Gabriele*に、「ミンネの歌人」*Minnesinger*は「愛の詩人」*Liebesdichter*という表題に変更され、*Cantilena*と「断片」*Fragment*は省略された。だがその際、初版と第二版との間には、その後の数多くのすぐれた詩が追加された点以外にも重要な相違が認められる。それは、第二版では単なる成立時期による配列という他に、詩の様式によるジャンル分けが施されていることである。増補加筆された第二版では全二巻が、「抒情的詩篇」*Lyrische Gedichte*、「叙事的・抒情的詩篇」*Episch-lyrische Gedichte*、「雑詩篇」*Vermischte Gedichte*と題された三部に構成分類されている。「抒情的詩篇」には後期の重要なソネット群が追加され、「叙事的・抒情的詩篇」では初期作品の出世作「レノーレ」とならんで「タウベンハインの牧師の娘」*Des Pfarrers Tochter von Taubenhain*などのバラードが一群を形成している。

3. 販売戦略

『詩集』出版にまつわるこうした負の要因を挽回すべく、ビュルガーは積極的に販売の計画を練り上げる。画家ホドヴィエッキへの挿絵の依頼もそうした計画のひとつであった⁷。

ダニエル・ニコラウス・ホドヴィエッキ *Daniel Nicolaus Chodowiecki* (1726-1801)は、当時ドイツでも

つとも有名な挿絵画家で、彼の銅版画を採用するか否かがその書籍の売り上げを大きく左右するとまでいわれた。出版業者ディーテリヒと著者ビュルガーはそうした事実を踏まえ、この挿絵画家の作品によって『詩集』の売れ行き向上を期待したのである⁸。

『詩集』のために準備された挿絵は、豎琴弾きを描いた口絵を含め計八枚であった。二篇の抒情的詩篇と五編の譚詩のために描かれた挿絵は、それぞれ各詩篇の冒頭ないし末尾に別刷りの頁として印刷されている。挿絵はすべて、12折本の版形にふさわしい縦長の同サイズ(65mm×115mm)で、細い二重の枠線内に描かれている。これらの銅版挿絵は原画も彫版もホドヴィエッキ自身であり、そのことを示すクレジットが各版画の右下に見られる。

売れっ子画家ホドヴィエッキに仕事を依頼したことによって『詩集』出版の時期が遅れるという事態が生じたものの、バラードの場面を写し取った版画に関するかぎり、ビュルガーはそれらに満足をおぼえ好意的であった。

きみはほく同様ホド [ヴィエッキ] の銅版画を不足なく思うでしょう。口絵の銅版画の、短かつらを着けたあの豎琴弾きだけは、ほく同様、きみもたいそう腹が立つでしょうが。民衆詩のアレゴリーをきみが見誤るわけがありません。ほくがホドに指示しておいたのは、熱心に耳傾け、あらゆる身分の聴衆を前に豎琴ないしはその他の庶民的な楽器を弾く、簡素だが今風な衣装をまとった弾き語りの歌い手でした。ところが、描かれているのは年寄りの俗物です！きっとホドは、多くの人々と同じように、役人であるほくにそんな姿を想像したのでしょう。本当に！自分を版画に彫ってもらうには今が良いときなのに。その他の点ではホドは、彼に示したほくの考えを見事に理解してくれました。とくにレノーレの幽霊の一団の一枚はどう思いますか？きみなら、それらの版画やその内容を見誤ることはないでしょう。(1778年4月30日付ボイエ宛書簡 *Briefe II*, S. 278)

さて、このようにビュルガーは、当代きっての人気画家の挿絵を『詩集』に組み入れることで『詩集』の売れ行き向上を期待したわけであるが、これ以外にも、より現実的・实际的な企画によって自著の販売促進を狙った。すなわち、前払い制の出版ならびに予約購入の計画がそれである。

前払い制の出版は、1770年から1810年の時期のドイツでとりわけ頻繁に行なわれた出版形式のひとつであった。18世紀ならびに19世紀のドイツ出版事情に関する研究者 R・ヴィットマンによれば、代金前払い購入ないし予約購入には作家と出版業者に次のような利点があった。「すなわち、それれはリスクのない儲けを可能にし、資本金をギリギリに抑さえ、高い純益を約束した。しかし、前払いする者ないし予約購入者も根本的な特典を期待した。つまりそうした購入者は後日、店頭価格よりも著しく安価な額を支払い、刊行後に刷りたての本を手にし、挿絵の最善の版を入手し、しばしば異なる紙質の選択をしたが、それにたいして後日の版は並製の紙質でしか入手できなかった⁹。」ヴィットマンの推測によれば、1770年から1810年の間に前払い制で告知された書籍の数は少なくとも6倍に跳ね上がったという。前払い制度はかくして、18世紀に慣例であった不正な海賊版から出版業者と作家を護る手段となっていたのである。海賊版は、成功を期待できるタイトルのみを扱うことによって、その出版業者は印税を支払わず、原稿審査の経費を節約しそのリスクを軽減したので、本物より安価であった。首尾一貫して、海賊版の方が売れ行きがよく、一方オリジナルの出版業者のもっと高い作品はしばしば売れ残った¹⁰。前払いでは、それにたいして、本物の出版業者には資本が確実に投入され、同様に作家には印税が約束されたのである。

ビュルガーもまた、彼の時代の多くの他の作家らとともにこうした知的財産の保護をめぐる討論に積極的に関与したひとりであった。1775年以来、彼はゲッキングとともに前払い制・予約購入制に関連する自費出版のプロジェクトを計画し、また1777年には『海賊版防止の提案』*Vorschlag dem Büchernachdrucke zu steuern*なる文書を発表していた。1778年版の『詩集』も大部分において自費出版の企画となった。この本の刊記に「1778年、ヨーハン・クリスチャン・ディーテリヒ社にて印刷および委託販売」とあるように、出版者ディ

ーテリヒが果たしているのは主に委託出版の仕事である。本の広告を担当したのはビュルガーと彼の友人たちであった。1778年8月28日に彼はボイエに、自署した数通の手紙に添えて、最初に印刷された『詩集』50部の広告を送付し、手紙と広告を知人に回覧するやうにとこの友人に依頼している。彼らもつばら本の宣伝を行ない、予約を受けた。定期刊行物に公表された広告がたとえ多くの注文をもたらしたにせよ、ビュルガーから手紙を受けた、またボイエや他の友人達によって推薦され委託された義援金募集者の個人的な契約の方がより確実に効果的であった。こうした活動によってはじめて、ビュルガーの詩集は世に広く伝播したのである。ボイエがビュルガーに宛てた次の書簡の生々しい文面は、この活動の実際の様子をたいへんリアルに伝えてくれる好例である。

メクレンブルクではシュプレングル [法学生] がきみのために働いてくれるに違いない。なぜきみはシュヴェーリンのヴァッシェンフーゼン [法律顧問] 夫人に依頼しないのだ? コペンハーゲンに関しては両シュトルベルクに書かなければいけない。私に手紙を送ってくれたまえ。ケルン、ボンなどでの世話はシュプリックマンがやってくれると言っている。オスナブリュック、クレーヴェ、ヴェーゼルも同様に彼がやってくれる。無論、ラ・ロッシュ夫人には、援助くださいますやうにと書き送った。デュッセルドルフではきみのミューズの優しい愛好者であるヤコービ兄 [弟] に。エアランゲンではミラーが知恵をしぼってくれるに違いない。ウルム、ハル、メミンゲン、ハイルブロン、アウグスブルク、そしてバイエルンも同様。彼にはひと包みそっくり送りましたまえ。ホルシュタインはすべて私が面倒を見る。ハーメルンも同様だ。ケーニヒスベルクへは、折りを見てペンツェルに宛てて書きたまえ。レーヴァルへはカルポフ教授に。リガは、シュレーゲル教授およびローゼンベルク教授に。ペテルスブルクには手蔓がない、ダンツィヒにも。しかしきみは、ゲッティンゲンでは自分でその他のミューズの息子達の間をあちこち照会してくれたまえ。シュテットインではニコライが方策を立ててくれるに違いない。ブレーメンではフォルキング法律顧問。カールスルーではベックマン教会顧問。ギーセンではヘップフナー教授の方がいいだろう。なぜすぐにヴァイマルのゲーテに手紙を書かなかったのだ。クリンガーがザイラーの仲間と一緒に居る場所を知っているなら彼にも書きたまえ。ヴェッツラーの世話はマダム・ケストナーがみってくれる。ウィーンではデニスとリーデル [美術大学教授] に書きたまえ。前者は僧院長だ。[中略] たいした苦勞もなく私はここですでに40人の予約注文者を得たし、ハノーヴァーだけで100人は思い当たる。私はきみが女王を何とかすることを狙い、そうしてくれることを期待している。もうすでに私はもっと多くの諸侯を射とめたよ、プファルツ選帝候、オルデンブルク、メクレンブルク公、等々。(1777年3月19日付書簡 *Briefe II*, S. 128 f.)

さて、このような方法で販売拡大をもくろまれた『詩集』ははたしてどのような購読者を得たのであろうか。またさらに、民衆詩の理念をかかげるビュルガーが求めた読者と実際の読者層とははたして理想的一致をみたのであろうか。次に、書物としての『詩集』の読者の問題に論点をうつすことにしよう。

4. 『詩集』の読者

ビュルガーの手紙によれば、『詩集』の印刷総数は2500部であった¹¹。そのうち購入先が確定できるのは総計1823部。このように正確な数字を知ることができるのは、すでに述べたとおり、『詩集』に掲載された28頁にも及ぶ予約者名簿による。そこには1535人の予約購入者の名前がならんでいるが、なんといっても注目に値するのは、18名の著名な国家要人の筆頭に挙げられた「英国女王陛下」の称号である。「これは初の快挙で、この地ではたいへんな注目を引くことになろう」(1778年3月6日付書簡 *Briefe II*, S. 240 f.)とボイエは、「狩り」の成功を自慢げに報告している。いずれにせよ、ハノーファー王国が当時帰属していたイギリスの女王が予約者名簿の巻頭を飾ったという事実は、ビュルガーにとって、女王に詩集を献呈するという当初の

計画以上に名誉なことであったのはいうまでもない¹²。しかしながら、こうした名簿を手がかりにしても実際の購読者の実体を正確に把握することはもちろん不可能に近い。事実、この名簿に記載されなかった予約者も多数存在すると推測されるのである。そのことは名簿の終わりの頁に添えられたビュルガーの「謝罪文」から明らかである。

予約購入者諸兄にご容赦を乞ひ願いますことに、すべての方々を詳細を付してここに記載させていただいたわけではございません。訳あって印刷の仕上がりが最後に至るまで遅延いたしました結果、出し惜しみからなどではなく、時間の不足から、かくも要約して取りまとめた次第であります。印刷の美しさを保持なさるためには、ひよっとしますとまだ乾いておりません御本はすぐに装丁なさいませぬようお願いいたします¹³。

ここで言及されている「遅延」は、先にふれたホドヴィエッキの仕事の遅れが原因であつたらしい。しかしいずれにせよ、募集者達の怠慢から、そしてそれ以上に、他のことでも認められるビュルガー自身の無頓着から、予約者名簿は名前や姓、職業や身分、あるいは場所についての詳細な記述を欠いたまま印刷にまわされたのであつた。くわえて、名簿中の何人かの人物は、たとえば「シュトラースブルクの学者シェーンフェルト、同地のまたその近在の同郷人・友人のために」100部、また「書籍取扱業者ヒンブルク」が30部、というように複数の部数で記載されているケースも見受けられるため、それらの部数の書籍の実際の購読者は判別できない。このような理由から、実際の予約購読者数を厳密に推定することは困難であり、いわんや当然のことながら実際の読者層を割り出すことも不可能である。さらに、ヴィットマンが指摘するように、「当時の収入、生活費、物価、経歴、階級秩序、称号などに関する(われわれの)きわめて乏しい知識」がまた、各社会層への正確な分類を困難にしているのも事実であろう。

しかしこうした数多くの不確定要素の中でも、確証されうる事実も存在する。それは、貴族ならびに職業記載のある市民・聖職の代表者・書籍業者などが占める予約部数が比較的高いパーセンテージを示しているという事実に他ならない。このことから、ビュルガーがいわゆる「民衆詩人」としてとりわけ低い社会層でのみ人気を博したとするローレ・カイクの見解は、明らかに歴史的事実に反しているように推察される。

予約者名簿ならびにビュルガーの往復書簡が示している事実は、彼の詩集がまず最初に作家、学生、学者、書籍業者を通じて広まり、そうした教養階級の読者層を獲得したということである。また、名簿を地域別に丹念に調査すると、購読者の多い地域がハノーファー、ブレーメン、ゲッティンゲン、ミュンスター、オルデンプルク、ドレスデン、ブラウンシュヴァイク、ハンブルク、ハルといった都市であることがわかる。それらはビュルガーと親交のあつた募集者らがもっとも積極的に活動した場所と一致している。

1778年の『詩集』は詩人ビュルガーの経歴にとってたしかに画期的な出来事であつた。それは彼が自己の民衆詩の理念を『詩集』を通じてこの時期に理論的に確信し、民衆詩人としての内実をまとまりのある形で公衆にたいし実際に提示する機会を得たからである。通俗的な民衆文学をめぐるビュルガーのこの努力は、『詩集』初版刊行以降もさらに強い確信をもって続行されてゆくことになる。

注

- 1 本稿で使用した筆者所蔵の『詩集』の出版元記載は、Göttingen und Nürnberg bei Johann Christian Dieterich und George Peter Monathとなっている。

- 2 ビュルガーの「民衆詩」の理念に関する総括的説明は、拙稿「G.A.ビュルガーの民衆詩論」（上智大学『ドイツ文学論集』第30号、1993年）を参照。
- 3 *Gedichte* 1778, S.vi.
- 4 *Briefe von und an Gottfried August Bürger. Ein Beitrag zur Literaturgeschichte seiner Zeit. Aus dem Nachlasses Bürgers und anderen, meist handschriftlichen Quellen.* Hg. von Adolf Strodtmann. 4 Bde. Berlin 1874. Nachdruck Bern 1970, S. 97. （以後、この書簡集からの引用は巻数とページ数を本文中に記す。）
- 5 *Gedichte* 1778, S.vi.
- 6 *Gedichte* 1778, S.vi.
- 7 Vgl. Willi Geismeyer, *Daniel Chodowiecki*, Leipzig 1993.
- 8 Vgl. Hannelore Schlaffer, *Klassik und Romantik*, Stuttgart 1986.
- 9 Reinhard Wittmann: *Subskribenten- und Präumerantenverzeichnisse als Quellen zur Lesergechichte.* In: R.W.: *Buchmarkt und Lektüre im 18. und 19. Jahrhundert. Beiträge zum literarischen Leben 1750-1880.* Tübingen 1982, S. 46-68, hier S.49.
- 10 1778年版『詩集』の海賊版はその年から翌年にかけて少なくとも3種類が出版され、5回も版を重ねたものもある。筆者はその中のザルツブルクで出版された1779年版の一冊を所有するが、印刷、紙質、挿絵ともにきわめて粗悪である。
- 11 Vgl. *Briefe* II, S. 262.
- 12 Vgl. *Briefe* II, S. 148.
- 13 In: *Gedichte*, unpaganiert.